

# 私立大学研究ブランディング事業

## 令和元年度の進捗状況

学校法人番号	231042	学校法人名	清光学園		
大学名	岡崎女子短期大学				
事業名	「子ども好適空間」研究拠点整備事業				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	685人
参画組織	幼児教育学科第一部・第三部 現代ビジネス学科 地域協働推進センター 親と子どもの発達センター 研究推進センター				
事業概要	<p>本学幼児教育学科で培われてきた保育、幼児教育に対する知見の蓄積と地域に対する子育て支援、現代ビジネス学科において実践しているユニバーサルデザイン、住環境デザインの教育・研究、及び産学連携事業を学内横断的に接続し、子どもが安全に活動し、子どもにとって居心地が良く夢中になれる空間を研究する「子ども好適空間研究所」を本学独自のブランドとして確立し、研究成果を地域のこども園、幼稚園、保育所、企業（ハウスメーカー、デベロッパー、工務店等）、子育て世帯等に還元する。</p>				
①事業目的	<p>本事業は、本学の幼児教育学科の保育、教育研究と現代ビジネス学科のデザイン、産学連携研究を領域横断的に結合して「子ども好適空間研究所（愛称:hyggeラボ※）」を設立し、「子ども好適空間デザイン拠点」として研究成果を地域に還元し、短期大学のブランド価値確立を目的とするものである。※hyggeとは:デンマーク語で「居心地の良い」「快適な」等の意味。</p> <p>[社会的ニーズ]</p> <p>厚生労働省の「平成23年度人口動態統計」では子どもの死亡原因の0歳における第3位、1～19歳における第1位が「不慮の事故」である。さらにその詳細を見ると0～4歳においては交通事故や自然災害を除けば、窒息、溺死、転倒転落、中毒、火災など家庭や身近な場所で発生する事故による傷害が多い。一方で子どもが生活する住環境や、幼稚園、保育園などの保育、教育環境に、子ども特有の行動特性、心理特性を考慮した安全な環境をデザインしようとする事例は少ない。そのために子どもの事故を防ぎ、安全で安心できる環境を用意するためには、保育、教育の現場で勤務する人材と、家庭で育児に従事する家族に対する「子どものための空間デザイン」思考の浸透、普及が不可欠である。</p> <p>[研究ニーズ]</p> <p>1990年代後半より、日本の産業界において多様な世代、身体的特徴に配慮した製品、環境、サービスをデザインする「ユニバーサル・デザイン」の概念が浸透し、2000年代後半には特に子どもの安全・安心や、子どもの産み育てやすさに配慮した「キッズ・デザイン」の考え方も提唱されるようになった。しかし、子どもの住環境を設計、施工するハウスメーカーやデベロッパー、工務店等が子どもに関する具体的な知見やデータを保有していることは稀であり、住環境において「キッズ・デザイン」の概念に沿った安全・安心な環境デザインが実現されている事例は少ない。これは保育園、幼稚園においても特に2000年代以前に設計・施工された事例では同様であり、子どもの安全・安心を実現する環境デザインの研究と、その成果を社会に還元する取り組みが求められている。</p> <p>また、日本における思春期の若者の「自己肯定感」の低さは社会問題となっているが、自己肯定感の形成と幼児期の体験との関係が指摘されていることや、音、光、色といった外的刺激の量や質の不適切さと発達障がい児の「困り感」やその場にふさわしくないと受け取られてしまう動き等との関連を指摘する研究もみられることから、子どもが生活する空間は、1安全性を確保すること、2子どもが居心地の良さを感じることが出来ること、3その居心地の良さを拠り所に安心して自己発揮ができ、夢中になって活動できること、の3条件を同時保証する空間作りについて、今後研究ニーズが高まることが予測される。</p>				
②令和元年度の実施目標及び実施計画	<p>(実施目標)</p> <p>「子ども好適空間」創出に向けた研究プロジェクト、外部発信の拡充」</p> <p>・前年度収集、分析した「ヒヤリ、ハット」事例を元に、「子ども空間安全チェックリスト」を作成、発表、配布する。また収集した国内外のモデルケース空間事例をまとめた「hygge空間事例集」を発行する。「子ども好適空間デザイン教育」の実施に向けて、資料収集、カリキュラム作成、ルーブリック評価法の研究を行う。12月には「第1回子ども好適空間シンポジウム」を開催し外部発信を拡充する。</p> <p>(実施計画)</p> <p>・「子ども空間安全チェックリスト」の発行、配布(4月)・Webサイト全面リニューアルの実施(5月)・地域こども園、幼稚園、保育所、住宅に対するモデルケース空間事例の調査・授業:「子ども好適空間デザイン教育論(仮称)」資料収集、カリキュラム内容検討(5月～10月)・「hygge空間事例集」の発行(11月)・FD・SD研修における学内向け「子ども好適空間研究所」活動報告(2月)・「第1回子ども好適空間フォーラム」開催・評価委員会開催(3月)</p>				

<p>③令和元年度の事業成果</p>	<p>(事業成果)  &lt;研究活動&gt;  事業計画書に記載し、平成29年度より進行している6件の研究プロジェクト「必須研究」と、全教職員に対して研究テーマを募集した2件の「課題研究」の計8プロジェクトの研究活動を引き続き進めた。研究活動に関連して岡崎市立保育所の改築計画への設計アドバイス、屋外「冒険遊び場」の開催、「安全チェックリスト」の作成を行った。研究成果の教育への還元として、現代ビジネス学科1年次の必修授業として「好適空間論」の授業を、計画より1年前倒して開始した。また、成果公表のための学術雑誌として「子ども好適空間研究」第2号を令和2年3月に発行し、研究論文7件、研究経過報告3件が掲載された。  &lt;広報活動&gt;  前年度作成した「hyggeLab」ロゴマーク、キービジュアルを使用し、「hyggeLab」特設Webサイトの更改をおこなった。特設Webサイトでは「hyggeLab Letter」と称したコラムを定期的に更新し、当事業の告知に努めた。  12月に「第1回子ども好適空間シンポジウム」を名古屋市で開催し、基調講演、研究報告、パネルディスカッション、展示を通じて情報発信を行った。</p>
<p>④令和元年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)  助成期間の最終年度の自己点検評価として、事業計画時に掲げた4つの成果目標の達成度について、「研究ブランディング事業評価委員会」により評価を実施した。  ・「成果 1.保育空間を自ら改善、デザインできる保育者、育児空間を企画、販売できるビジネスパーソンの育成」について 評価点:(13点/20点満点)  ・「成果 2.子ども空間デザイン教育と、効果測定法開発」について 評価点:(15点/20点満点)  ・「成果 3.保育環境の実態、保育従事者の環境に対する意識実態データの蓄積」について 評価点:(15点/20点満点)  ・「成果 4.国内外の子ども好適空間事例の蓄積と発信」について 評価点:(15点/20点満点)  総合点:(58点/80点満点)  内部評価委員による自己点検評価の総評として、岡崎女子短期大学の「研究ブランディング事業」を積極的に学内外に発信し、取組の社会的認知度を高めている点、各成果目標が概ね実現されている点が評価できる一方で、事業3年目にあたる令和元年度において「十分に実現されている」と評価できる項目は無く、助成期間終了後も本取組を継続し、当初からの成果目標の十分な実現に努めることが、課題点として挙げられた。</p> <p>(外部評価)  令和2年3月に「研究ブランディング事業外部評価委員会」の開催を計画していたが、新型コロナウイルスの感染拡大による影響で委員会の開催を中止し、代わって外部評価委員に資料と評価票を郵送する形で事業に対する評価を頂いた。4つの成果目標に対する達成度の評価は以下の通りである。  ・「成果 1.保育空間を自ら改善、デザインできる保育者、育児空間を企画、販売できるビジネスパーソンの育成」について 評価点:(18点/24点満点)  ・「成果 2.子ども空間デザイン教育と、効果測定法開発」について 評価点:(18点/24点満点)  ・「成果 3.保育環境の実態、保育従事者の環境に対する意識実態データの蓄積」について 評価点:(20点/24点満点)  ・「成果 4.国内外の子ども好適空間事例の蓄積と発信」について 評価点:(20点/24点満点)  総合点:(76点/96点満点)  外部評価委員からの意見として、園舎改築の助言や、「子ども空間安全チェックリスト」、冒険あそび場について評価する意見が挙げられた一方で、今後の課題として本事業で得た蓄積データを保育者等の養成にどのように還元するか、子どもにとっての高い安全性と主体的な活動のバランスの定義の難しさなどの意見が寄せられた。</p>
<p>⑤令和元年度の補助金の使用状況</p>	<p>令和元年度は、承認された事業計画に基づいて、「第1回子ども好適空間シンポジウム」開催にあたり、会場・備品費、登壇者講演費、交通費、消耗品等に使用した。研究においては、事業の中核となる6プロジェクトで使用する機器、用品、消耗品などを購入した。</p>